

イギリス科

教養学部 後期課程
教養学科 地域文化研究分科
イギリス研究コース

進学ガイダンス資料

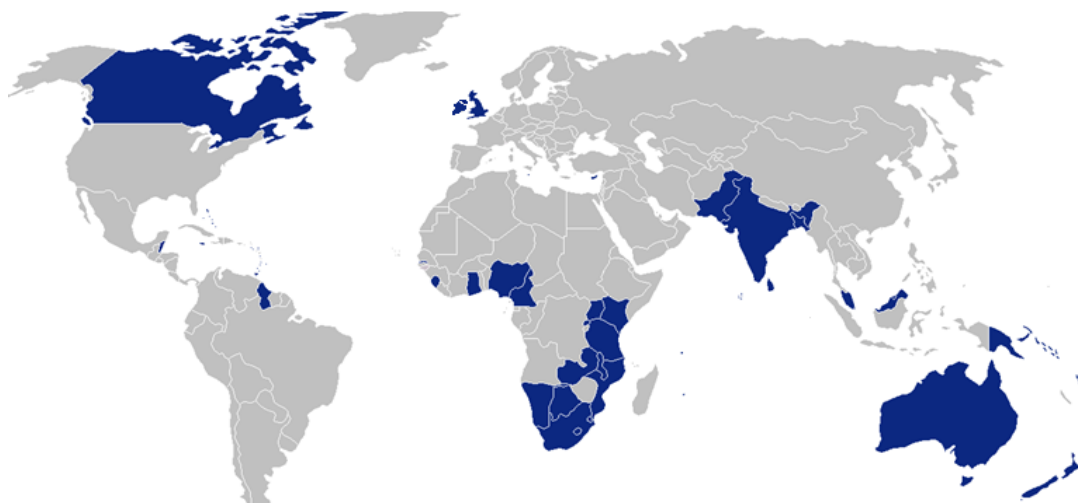
2024 年度



1. 「イギリス科」について

「イギリス科」とは【東京大学教養学部（後期課程）・教養学科・地域文化研究分科・イギリス研究コース】と【東京大学大学院・総合文化研究科・地域文化研究専攻・小地域イギリス】を指し、学部と大学院の組織を併せて慣例的に「イギリス科」と呼ばれています。イギリス科では、イギリス連邦諸国および、旧イギリス連邦諸国（特にアイルランド）を含む地域の文化や社会の理解を深めるためのプログラムを提供しています。

イギリス科の教員は、文学・思想・歴史などさまざまな専門分野でそれぞれに第一線をゆく研究者です。授業で扱われる内容も、政治経済・歴史・思想・文化・文学と広範囲に及びます。イギリス科の学生は、ある文化・社会を読み解くためのさまざまな切り口を多数の教員から学び、各々が持っている問題関心へと創造的にアプローチしていくことが求められます。



◆2024 度イギリス科運営委員教員紹介◆

氏名	専門的な研究テーマ
西川杉子（S セメ：主任； A セメ：副主任）	イングランド近世史、近世ヨーロッパにおける宗派ネットワーク
三原芳秋（S セメ：副主任）	英語圏文学、文学理論、思想史
小川浩之（A セメ：主任）	現代イギリスの政治外交
後藤春美	国際関係史、イギリス帝国史
アルヴィ宮本なほ子	イギリス文学・文化、ロマン主義およびその南半球への影響

◆2024 度イギリス科論文指導教員紹介◆

氏名	専門的な研究テーマ
ジャクリーン・アンダル	現代イギリス社会論、ヨーロッパ移民の比較研究

2. 学生生活

2024年4月時点でイギリス研究コースの学部生は合計4人。これに大学院生を加えて、イギリス科というまとまりのある「学生のコミュニティ」が成り立っています。このコミュニティの核となっているのが、**コモンルーム（8号館402号室）**です。この部屋はふだん勉強・休憩・飲食のためのスペースとして利用されており、学生が入れ替わり立ち替わりやって来ます。コモンルームで、3・4年生、大学院生、教務補佐、そしてしばしば教員も加わり、時には知的で活発な議論、あるいは往々にしてとりとめのない雑談が交わされます。イギリス科の特徴は、先輩・後輩と分け隔てのない、アットホームな雰囲気です。

後期課程（学部3・4年生）の学生生活におけるゴールは、卒業論文の執筆です。3年次には卒業に必要な単位を揃えながら、自分自身が関心を持っているテーマ、自分なりのアプローチの仕方を考えていきます。4年生に進級する時点で単位に不安がなく、卒業論文のテーマが決定していることが理想です。4年次には、指導教員やネイティブ・スピーカーの先生からの1対1の丁寧な指導のもと、英語による卒業論文執筆（後述）を進めていきます。

学生はそれぞれの関心に応じて、教養学部のサブメジャープログラムなどの分野横断型プログラムに参加しています。また、イギリス科に所属している学生は、必要単位を揃えて教育実習を行うことで、高等学校教員免許を取得することが可能です。

コモンルームの設備

コモンルームにはイギリスやアイルランド、そしてイギリス科の授業に関係する蔵書が充実しています。イギリス科に所属する学生は自由に閲覧・貸出することができます。

学習に必要なパソコンは、デスクトップPC（Windows2台、Mac1台）があります。他にもXeroxコピー機、プリンター、スキャナ等があり、所属する学生は自由に使うことができます。研究室にはWi-Fi設備があり、ノートPC等を接続することが可能です。

お茶やコーヒーなどの設備もあり、飲食することもできます。

※ただし、新型コロナウイルスの状況次第で、コモンルームの利用が制限されることがあります。



在学生、卒業生、関係者の声

学年を問わず仲がよく、学生生活が楽しくなります。/紅茶とコーヒー（常備）が美味しいです。/イベントが楽しい。/イギリス科そのものがステキな一つの家族。（元教務補佐）/とにかく仲がよい！（N教授）/イギリスのおいしさを味わえる！（イギリスチーズやイギリス土産のお菓子など）/お湯も電子レンジもコピー機も様々な人間も何でもあります。だって大英帝国ですから。ラブリー、ラブリー。/イギリス留学への門戸。/英語で少人数はイギリス科だけではないでしょうか。/コピー環境が充実している。/はじめは英語が苦手でも上達します。/研究テーマは自由。何でも学べるのがよいです。先生方が寛大。/懇切丁寧な個人指導が受けられます。特に卒業論文の指導が充実しています。/イギリス、アイルランド史のレファレンス類が非常に充実しています。/英語その他の技能をのばせます（リサーチスキル、プレゼンスキル、ディスカッションスキルなど）。/イギリスだけでなく、アイルランド、オーストラリア、NZなどに興味がある人もここで学べます。



3. 海外留学と国際経験

イギリス研究コースからは毎年数名の 3・4 年生が、大学の留学プログラムを利用するなどして、海外の大学に短期・長期の留学をしています。研究コースが小所帯であることを考えると、東京大学の中では極めて高い留学率を誇ります。

留学においては、教養学部が世界各国の大学と提携して行っている交換留学制度、KOMSTEP (=Komaba Student Exchange Program 総合文化研究科・教養学部交換留学) と、USTEP (=University-wide Student Exchange Program 全学交換留学プログラム) の 2 種類が主に利用されています。これらの募集は定期的に届くので、希望者は駒場グローバル化オフィス (21 世紀 KOMCEE・West 地下 1 階) で確認してください。

通常、英語圏の国々では、少なからぬ数の大学が高額な授業料を日本人学生に課しており、それが留学希望者の悩みの種です。しかし、KOMSTEP と USTEP 留学の場合、東京大学に授業料を納めれば留学先に授業料を払う必要がありません。提携している大学によっては、大学寮などの住居を無償提供、あるいは奨学金が出る場合もあります。

ほかにも様々な留学方法によって留学した先輩がいますので、ぜひコモンルームで情報収集をしてみてください。

これまでのイギリス科学生の留学先は、以下の通りです。

- ウォリック大学 (イングランド)
- ダブリン大学トリニティ・カレッジ (アイルランド)
- ミシガン大学 (アメリカ)
- トロント大学 (カナダ)
- シドニー大学 (オーストラリア)
- オークランド大学 (ニュージーランド)
- オタゴ大学 (ニュージーランド)
- ルートヴィヒ・マクシミリアン大学
(通称ミュンヘン大学・ドイツ)



また、教養学部はグローバル化を推進しており、留学以外にも多様な国際体験を積むことができます。海外の大学からは駒場の短期交換留学プログラムを利用して多くの留学生が訪れており、彼らと机を並べて学ぶ機会があります。また、海外から教員を招いて授業や講演などが開催されており、イギリス科でも英語圏の大学教員の授業を受けることができます。



4. 卒業論文

英語による論文執筆・発表

イギリス研究コースの学生は英語を用いて卒業論文を執筆します。対象地域の言語で卒業論文を執筆するのは、地域文化研究分科の重要なルールです。

また、卒業論文の作成と共に、**二回の卒業論文中間発表会（例年、第一回が6月下旬～8月上旬、第二回が11月）**での報告が義務づけられています。一月上旬に卒業論文を提出した後は、**口述試験（1月下旬～2月上旬）**があります。これらの口頭発表と質疑応答はすべて英語で行われます。

英語で考え、英語による文章表現を磨き、英語で自分の考えを論理的に話すということは、コミュニケーション能力を高めていくうえでも、英語の運用能力を育成するうえでも不可欠な訓練となります。特に卒業論文執筆の1年間における学生の英語力の上達には目を見張るものがあります。

テーマ選択

卒業論文では、文学・哲学・歴史・現代政治・芸術・大衆文化など、自分の関心のあるテーマを自由に選択してリサーチをし、自分の考えを、一次資料、先行研究などを十分に読み込んで学問的に纏め上げることが期待されています。

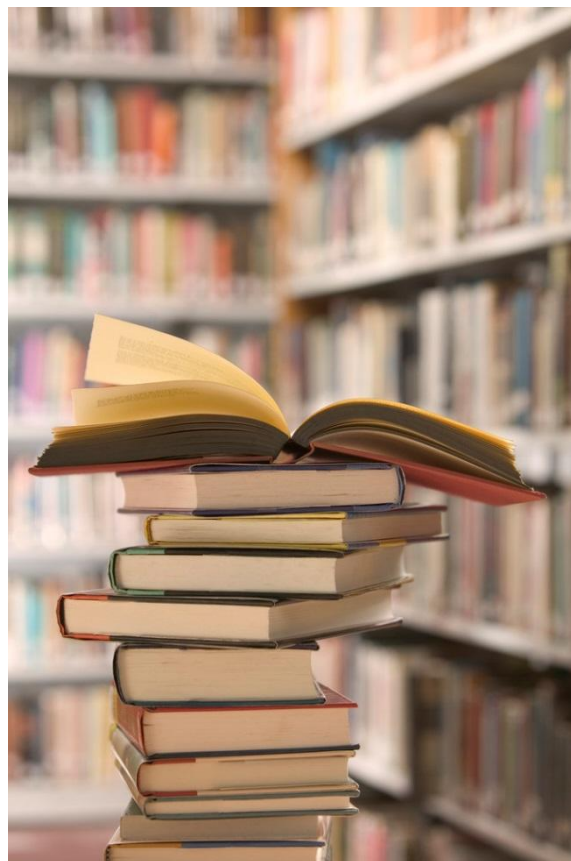
イギリス科は常に新しい知的発見・チャレンジを歓迎し、サポートしていく姿勢を取っています。そのためイギリス科の教員それぞれの専門とは一致しないトピックでも、指導をお願いすることが可能です。これまで多くの卒業生が、教員にとっても大きな刺激となるテーマを取り上げて卒業論文を執筆してきました。（「5. 近年の卒業論文タイトル」参照）

教員による指導とアカデミック・ライティング

4年生は自分の卒業論文のテーマが決まり次第、特定の指導教員について定期的に面談をしながら、リサーチと執筆をすすめていきます。繰り返しますが、学生が指導教員の関心に合わせて研究するわけではありません。学生は自らの責任においてテーマを選択し、自分自身の知的な生産活動を行ってゆくのです。指導教員は学術研究の専門家として、リサーチの仕方や学問的な手続きなどについてアドバイスするという立場をとります。

イギリス科では英語で書くという大きな関門がありますが、進学する時点で全ての学生が英語を得意とするわけではありません。そのため授業では通常の英語のライティングのほか、ネイティブ・スピーカーの教員による「論文指導」によって学生を丁寧にサポートします。

言語に関わらず、自分の考えを論理的に纏めるという作業には、言葉にすることのもどかしさ・苦しさが伴います。卒業論文を執筆するプロセスは決して楽ではありませんが、真剣に取り組むことは大きな達成感をもたらし、人生の長期的な視点から見ても有意義な経験となるでしょう。



5. 近年の卒業論文タイトル

2023 年度

* The Misconceptions about Robert Fortune's "Industrial Spy" Image and its Potential Negative Implications in the Field of Postcolonial Studies

2022 年度

* External Influences on Northern Ireland Peace Process during the Premiership of Tony Blair

* Re-evaluating Success and Failure in Virgin Group

* British Immigration Policy Under Tony Blair: Was Multiculturalism Idealistic or Practical?

2021 年度

* Journeying Through the Pages: Michael Morpurgo's Novels for Children as Antidotes to Adult Normativity

* The Fear of the Unknown: Anti-Railway Sentiments in England during the 1830s and 1840s

* Changes in Executive-Legislative Relations in the United Kingdom, 1997-2015: Much More of a Congressionalising House of Commons Than a Presidentialising Premiership

2020 年度

* The Changing Position of Humanities in British Educational Policy from the Late 1910s to the Early 1920s with Special Reference to *the Crewe report* (1921)

* The Rise and Fall of the Blair Government's Ethical Foreign Policy

* Making the Monarchy Popular: With Special Reference to the Public Image of Queen Victoria and the Media

* Political Communications in the Thatcher Government: A Comparison between the Falklands Conflict and Sino-British Negotiations over Hong Kong

2019 年度

* The Tariff Reform Campaign

* *Emma* and Social Status

* The Decline in the UK Automobile Industry

2018 年度

* The Representations of Negative Capability in Keats's Poetry

* Keeping up Appearances: Memory in Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*

* The Women's Co-operative Guild and the Maternal and Child Welfare Movement

* The Establishment of Mountaineering and the First Ascent of Matterhorn by Edward Whymper

* Human Ties in Graham Greene's *England Made Me*

* Francis Masson and the Early Stage of the British Empire

2016 年度

* "For every thing that lives is Holy": William Blake's Religious Perspective in *Songs of Innocence and of Experience*

* The Role of Thomas Arnold's Educational Reform -The Empire and Public Schools-

6. 卒業生の進路 (過去五年間)

東京大学大学院 総合文化研究科 地域文化研究専攻

東京大学大学院 総合文化研究科 言語情報科学専攻

東京大学大学院 総合文化研究科 国際社会科学専攻

東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻

東京大学教育学研究科総合教育科学専攻 大学経営・政策コース

東京大学 (事務職員)

独立行政法人日本芸術文化振興会 (国立劇場)

東京都庁

NHK

TBS テレビ

朝日放送株式会社

NTT データ

三井不動産株式会社

三菱商事株式会社

株式会社チームボックス

日本政策投資銀行

サザビーリーグ HR 社

株式会社ワークスアプリケーション

オーシャン・ネットワーク・エクスプレス

日本経済新聞社

※ 本人の同意があるもののみを掲載しています

□ イギリス研究コースへの進学等についてのご相談・ご質問は、下記までお願いいたします。

イギリス科研究室

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学 教養学部 8号館 402号室

tel: 03-5454-6304

email: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp

HP: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>

blog: <http://british-section.blogspot.com/>